重修真書太閤記

九編 九

459
89

へ13 御
門 攻
號 459
卷 89

消 東洲文庫

重修眞書太閤記九編卷之廿五

森武藏守長一戰死之事
并池田丹後守圍を破る事

長久手原の戰急にして上方勢大に亂れ立過半龍泉寺山又ハ樂田の方へ敗走しける池田勝入齋と森武藏守とハ我うゝ望ミ一軍なり勝ハ三河の主となるゝん負ハ岩崎の土となるゝんとあのひ定め一車ゐとへ今日と限りと身を捨て打とも射とも一足も引ー引ゐと競ひたゝゝり四方八面に切たて難たく敵の多勢にもひるまず戰ひける二

同攻會印

人の心と推量るに天正十二年三月十七日の夜森武藏守羽黒の八幡林にて奥平九八郎大須賀五郎左衛門尉丹羽勘兵衛為に打敗られ能者多く討たるゝと無念に思ひ今度は花々敷軍して岡崎の城を乘取り先日の恥辱を雪くべしと云さこに勇こて出張をゝ三州勢に不意をとらさと若年の大将三好孫七郎秀次一軍もを敗走ゝ遠藤但馬守長谷川藤五郎堀久太郎秀政も追立られ實に危急の合戰に及ひゝそのゝゝめをいくへ勝入齋と武藏守との心に起をゝ事なるへい武藏守長一眞先に進んて士卒を下知ゝ攻

爭ふそのさまとのゝたとへて云へくへ長崎次郎の由比の濱の戰ひ大内兵義弘の堤の浦の合戰も是まへいうて勝るへき池田勝入齋ハ自身の遺恨とそゝさん為秀吉卿と勸めて中入をとうゝに岩崎の城を念なく攻落ゝ手始めとして勇を立此いきおいにて三州へ亂入ゝ岡崎を取んと掌のゝのを取るひとゝと敵を侮り首を實檢ゝ居たる処へ三州勢後陣より切かゝる大将を追散ゝ名ある侍を多く討をつるい世に聞えゝ日頃の勇氣も忽ちゆくゝ我先にと敗走をゝ益天正十二年四月九日の事そうゝ森武藏守と勝入齋と一処に打寄敵に

合戦と左右より引とりて敵を破る離合の陣勢開結の軍法心より淳たる大将あり つゝ老功なり若又今日の軍より負たゝへ何の面目を以て秀吉を見んとおのゝ切ことなりと雨霰と飛来る矢玉もおそれぞ秋の野のをゝ立なゝぶ薄の穂よりも似さりふ三遠二州の侍ともう抜群の手柄をとんと大身の鎗の又廣あるまゝい素鎗より十文字片鎌ふとの穂先とそろへ枚さゝやゝうふ押寄ておのゝおのゝより突立る其勢のとさまゝ又そひしをへ上方勢散々より突立ゝ四度路よりあつゝたゝふふ処より猪腰原の辰巳より小高き処ふ御馬印とおゝ立おのゝ旗本勢と操出しゝあゝと見え白さあへの兵士七百余り森池田の勢と目の下より見おろし鉄炮の筒先とそろへて打出ひ是い井伊万千代直政の預る処の鉄炮ゝそいつをも勝をゝ手たまとなれい森池田の兵士ちをゝたゝあより多く討をとり

甫菴本より爰より井伊隼人佐り後裔井伊万十世と て十九歳長久手の辰巳ある山より三段より備へ白しゝあへの弓鉄炮の者五六百人先手と張てうをけをい堀り先勢是より辟易ゝ追止つて見えゝ処ふ久太郎もゝゝ走り来り使番の馬上を以てい

ふいに制し止人数と立んとせし共まちうけ成
て迯るを追来りし勢多はいと早速に立得ざ云々
白しるへさしたる弓鉄炮爰と先途と射けるに
ろう武蔵守あとと追立ると大音聲と上下知を
とも聞と顔に見えしうへ手鎗追取走り出追
拂ちんとをしと鉄炮すて森ら眉間と射たりけ
るふ聲もとびうつふさるふしてけり云々と見ゆ
とへ森と射たるへ井伊万千世の預処の鉄炮か
ア安藤彦兵衛覺書すへ森武蔵守と直次鎗すて
突ふをしと云
御旗本ろう安藤彦兵衛直次とちしめ究竟の壯士

池田勢の後陣ろう攻うるる池田ら家人に片桐平
右衛門伊木清兵衛今日と限うと駈ちしに命とお
しまび戦ふわとに三州勢も爰と大事と切むそぶ
勝入齋へ武蔵守と援け武蔵守へ勝入齋と見續つ
川眼さうしまるさけて朱とそそしと惡鬼羅刹の荒
しろ如く四角八面に走り廻りて士卒と下知し戰
ひける処に井伊万千代ら弓鉄炮のの池田と森と
の後へ廻り釣へうけるる鉄炮に打たてそうと今迫
へ阿修羅王の如く見へし武蔵守も鑁と傾け身と
ちしめ小勝と折て芝居にとうと打とくめらに進
み得と大須賀五郎左衛門尉康高本多彦次郎康重

水野惣兵衛忠重うくと見るうちに上方勢惣敗
軍と成つるに尺平うゝうゝ打破ると鎗を打ふう
聲と上てぞめゝうける上方勢いつまても心をうう
へやさけよとゆるとといへとも井伊万千世の打出
を鉄炮の烈さゝ恐怖して進ともゆゝびまと退く
とさへうゝとい透と伺ひ居こうう強ゝ戰をんと
もをび濱松方すてへ去ぬる山崎の軍ゝ明智ゝ天
王山と取得をして終ゝ軍破とゝと聞知たること
なう上方勢ゝ高うと取るゝあと御下知あゝゝう
へ井伊ゝ手の者過急ゝ士卒をそめうゝく打とゝ
めへ森武藏守鎧の袖ゝ玉三川をうう中うゝとの

のくうどともをび如斯鉄炮ゝ打をくめうゝと平ゝ
折ゝさてへ何とふをへさぞ我と手本ゝをゝと呼
をうゝ馬と進め三尺をうの大長刀を水車ゝ廻
し手負ゝ猪の荒るゝ如く直政の本陣さゝをうけ
向ふ遠三の壯士とも大将武藏守と見たうゝへ
我打取んとをゝうゝとも長一ゝ今日の軍ふう
日頃ゝ十倍ゝあうゝも猛虎狂象のをゝう廻るも
いうてが是ゝへ過へをと見るめもいとて花々ゝ
中ゝへさへゝ三左衛門尉ゝ子ありけりあゝと
の大将も多く世ゝあるゝと感をる人も多うう
森ゝ郎等橋本清太夫百々兵庫各務十大夫大塚五

郎三郎来原新右衛門とそゝめ誰うへ一人も後る
へき主と先たち駈走り目當と定めて打鉄炮の玉
よも怖とうをさけまとへ水野總兵衛岡部彌次郎丹
羽勘兵ゑとう勢ゑとう當りて戰へとも死生知を
の荒武者の荒よあまて働くゝとさとう防さゝ
ちと白けて見えたる処へ大須賀五郎左衛門尉康
高の組と杖山孫六本多八藏とて名譽の鉄炮あり
けるゝ両人いひ合を畔道と傳ひ足場とそゝう小
楯ととりて窺ひるゝ孫ゝひと定め切てそゝふせい
あやまさび森武藏守長一の眉間の只ゝゝ中う
ゝゝとよ鬼とよまとゝ勇将も馬ゝゝう眞逆まゝ落

て音もをび長久手原の露とさえすゝへ哀とそう
なゝ事共ゝゝ生年廿七歳とうゝ遠三の兵士等へ
上方の大将と討捕たゝと楯とたゝ籔とゝゝ
て喧めさゝとい森う手のゝゝ主の死骸と舁
あけ後陣のゝへと引退くもあれへまさへ敵と
向ひ引組てさゝ違へるもあう暫時の合戰と敵も
味方も多く亡ひとゝう榊原小平太大須賀五郎左
衛門尉其外の将士池田勝入齋とあまさゝと八方
ゝう追取巻て責近つく本多八藏ハ森う死骸と舁
ゝくのと追掛切ゝゝゝゝう森武藏守とハ知孫
とも何さと大将ゝゝとあのひ付その首取ん

とゝ〻見るゝ杉山ゝ鉄炮ゝ中うて散々ゝ打砕き
たゞいまゝと取ゝ及ぶ鎧物具太刀刀さいうゝ
ゝゝゝゝゝゝゝはそれのゝ分捕して引退を池田丹
波守輝重ハ寄来る敵を打散し機變をうて居
たりけるゝ味方の運も今日ゝとおゝひゝゝゝ
ハ古新輝政と中ゝゝゝ伊木清兵衛を後陣とな
自身眞先ゝ進ミ鉄炮の炮の黒こたらゝる眞中へ
面もふゝゝ鎗を入くゝのてうくゝあハ十文字ゝ突て
まゝうけるその有様ゝゝゝも勝ゝてゆゝゝゝ見え
たりゝハ勝入齋ゝ子ふゝけうゝと余所ゝ見る目も
いさまゝゝ丹羽勘兵岡部彌次郎をゝこゝゝ是を

討んとなりけるゝを池田丹波守伊木清兵衛一所ゝ
打集ゝ切立ゝハ丹羽も岡部も左右へこゝゝて
引退ゝ丹波守と清兵衛と古新を伴ひ亂ゝ立た
る三州勢を切ひゝゝ龍泉寺のうゝへ落て行池田
紀伊守之助ハ田中久兵衛ゝ注進を聞とそのゝ
我勢こゝゝを張出ゝ敵を待て居たりけるゝ案ゝ
違ゝ堀久太郎ゝ備も追立ゝ森武藏守ハ散々
ゝ勇を振ふて戰ひゝゝうとも終ゝ鉄炮ゝ中うゝ戰
死ゝるゝを見るゝゝ紀伊守ハ黒き馬ゝ打乘白熊
の采配を打ふゝ味方を進め戰ふゝとゝ井伊万千
代ゝ鉄炮ゝ打をくゝゝゝ味方侍一同ゝ勢をゝ

し振ひ〳〵うてうけ立〳〵うへ井伊う足輕まさ突立らまて引色よ見えつるふかう紀伊守得たりと勇こたら進め〳〵うと士卒とをけまし堀う手と一つよるゝんと攻うる

池田勝入齋武勇の事

并三州の両金次郎の事

池田信濃守信輝入道勝入齋年つのりて四十九歳その〳〵め勝三郎といひし時ゝ武運のあらえ世よ聞えたりける勇将ふうしう今日の軍の景氣とくうるよ味方危ふく敗軍の機をそよ顯てし知とうへとも抑ゝの中入の軍へ入道う勧めつ

るふかう秀吉の心ゝへ進こうゝどまけて許をしことゝいひうへ岩崎を攻落しつると功として早く引取へうゝとたのひふゝう深入し味方わと〳〵難義よ及ひ剌森武藏守と討をそよ續いてゝきの多く討死し心のの憂く居たりけるよ嫡子紀伊守之助う敵と追て大よ合戰し数う所の手と負ふうう打とるくびと塩手よ付赤よふうて切廻るとと勝入こるうよ見とあ〳〵紀伊守へ我子ふうらあつくれ勇士や未代ふとも一人當千の侍と云へ〳〵されとも我等う若き時の働よおのひくうへてへ緩く見ゆるなう若のとともふとゝとゝゝや

と云まゝに入道旗本をとり出し敵ともと追散し堀り勢と一手になり上方勢の敗らるゝを恥辱と清めんと身をのゝたゝかはしかゝはゝ片桐土肥牧野とゝもに森寺野村ふんとゝゆるされしのの共眞先に立面もふらず命をおしまず働さけるゝまゝ松平主殿助奥平九八郎左右ゝ寄來る道をさへぎり喰止んと揉立たり勝入齋は少しも騒らず我旗本の荒手をとゝめて是に當り先手の武者の氣力を助けるさわゝこの處に床机を立さを近習のゝの三十騎をゝと前後に立を例の活氣をふるひおどゝりの小勢をゝと早く打

と破り潰さるゝや我等ゝ手柄と見をへさゝと采配をふりたゝく下知しけるに相從ふ侍ども正しく主君の眼前ゝ何ゝをかしの猶豫をへさ撓入切廻り突ゝゝなしけるゝみど奥平ゝ勢も主殿助の手の者も後をしゝふいあらほとあまり景氣のこゝけしさをたのこゝびひゝを見ゝのちとゝるゝと目早き勝入そのゝのめやゝのゝ共と短兵急にをめきへ三州勢心へやたけゝおゝのへとも一人引二人引三人引四人と引立られ五六段こゝろも引退たゝ主殿助九八郎大音あげ見苦しゝも後と見をしゝのゝゝおいゝ某ゝ手本と出さ

ん見習ふて働けやと鐘の響くかうかうに下知しつゝ
川近付ものを切ては突ふせ〳〵廻りしハ池田勢
ましく押かへされて見えけるその時濱松御所ハ
山の半腹に御旗を立られけるや勝入斎の旗本を操出れ
を御覧して池田が旗本を操出そ早打出て高名せよと仰
られしかバ御旗本の壮士共承りぬと御請申安藤彦兵衛
直次永井傳八郎直勝走出る哉呼止られ万千代に差添手柄
致と上意ありしかバ畏りぬ誰かハ後れ可申とて
つゞいてかれも馳たりけるを万千代いらく〳〵と濘
鉄炮のもの操替〳〵おのれまもまに打立しハ池田
入道が旗本三十人ぞうり一同によおり敷て鎗の穂

先と高くなのりし万千代にそろしをめぐる安藤永井眞
先にとてぞかけよ入々打ものとも進んで御感
狀たまはるも今日なり遊して御勘當ゆるくんバ只
今なりと勇みたてハ万千代馬よりのりおりば歩行立
まそ鎗引さげかけ〳〵しハ白しるへのものとも我
おとらじと續きてかりその中に遠州の住人鳥居金
次郎と三州の住人平松金次郎とて濱松御所の近
習者ありたし平松金次郎ハ平生柔弱にして臆
病者とのゝしりしなり過し頃荒井の渡すて小田原
の北条が侍茨木五郎作といひしものと船に乗合
しに何とすやありけん五郎作金次郎を悪口せし

うへ定めて喧嘩なるべしと船頭どもめ心配せしに金次郎更に返辭に及ばず却て五郎作にさまさまに侘言して事故なく返りしを早怯ものの男氣あるべしと笑ひ合ひしうとも露心にかゝるいろもなくとて傍輩とのさゝやく噂ひとへに自然御聞あも入いまと上るも何と宣ひ出さる事もなく鳥居金次郎ハ武勇の名高きものなれば當番のいとまに山野とうけてうつ鳥獸をうつと常の慰とかしけまへ世に勝れし勇士あらんと人も賞翫したりしうへ是も御耳に入あらうまと別に仰出さるゝ事もなく然るに今日平松金次郎ハ一番に駆出

ると見てあの臆病のものゝいうなれハ今日ハ敵に向ふとに定めて忽に逃うとるべしあふあれやと見るわとに金次郎勝入齋の床机にうゝ居たるを見るとそのまゝ走寄を池田の郎等秋田嘉兵衛と鎗と合ハ是長久手の一番鎗あり其次に今村桐之助鎧とも著ぞ素肌にすてゝ來て竹村小平次と鎗と合と鳥居金次郎ハ今村淺之助笠原五太夫濱嶋十之丞と共に打揃て突うくれハ勝入齋の旗本にも渡邊勘頁古田甚内片桐與三郎梶浦兵七いつまも究竟の侍なり今日の手柄ハ我々のまと心にめて切うゝうゝハ鳥居今村も爰ぞ大事

の切處ゐり打破らるとても日頃の武邊も無ゐなるべく太刀の柄ハ折ゐ碎けゐ鎗の穂先ハ突折とも一寸も引ゝとゝろ合たるとハ芝居ハ鳴てとゝゝと

ののさゝゝゝ聞えけゝ井伊万千代いゝゝゐも

ゝて勝入齋を打取ゝやと諸勢ゐぬきんてゝ働き

けると見て勝入齋の手ゐゝも片桐半左衛門河合

又左衛門あゐとハ正ゝゝ森殿と打たる井伊万千代

のゝさゝゝと進こけるゝ片桐も河合も先刻ゐりて

けゝゝさ軍ゐ鎗ハ突折鎧の袖きゝゝおとされ兜ハ脱

て大童血眼ゐ血刀打ふゝ勝入齋の面ゐゝけ閉ゝ

井伊ゝ手の侍とゝゐを付ゝとゝをさたゝ甲斐國の

住人ゐ河合四郎左衛門と云ハ新羅三郎ゐゝ以來

甲斐源氏ゐ傳えゝる殺弓の達人ゐゝさゝつゐ引

をゐ矢種とゐゝまゐ射ける箭ゐ中ゝてさゝも強

勇とゝゐとつる池田ゝ勢少ゝゝゐゝて見えける

ゝ元ゐゝ今日を限ゝと思ひ切ゝとなゝふゝゝ

をゐゝもたゐゝゐ血鎧ゐたつ矢ハ蓑の毛ゐ似

たゐとハゐゝゐゝ血いくれゐゐの瀧となゝまとや

死のの狂ひと世の諺ゐいふゝ如くゝゝゝゝゐと

ハ今村桁之助竹村小平次ゝたゐゐ討とゝゝ小平

次のゝゐゝゝて今村ゝ首をゝゝんとなゝけるを

鳥居金次郎鎗おつゝとゝあゐとまゝと突ゝゝ終

ふ竹村と突伏て首をとれハ平松金次郎ハ秋田嘉兵衛と討取てあるゝ首をうさゝゝ鳥居と共ふ御本陣へ参上ゝ實検ふ入奉る御所ふハたゝゝに御覧の後金次郎両人とも出来ゝたりと仰せられと荒井の渡りふて臆病と振まひゝハ今日の為とう移て知りと打笑ひあひゝりハそゝゝ者も却て面目ふゝと顔とそむけりゝこゝより居たり此外池田方ふて古田甚内片桐與三郎梶浦兵七りと

ふ三州方ふても濱嶋十之丞笠原五大夫今村淺之助ふとおふゝ枕ふりゝたり

甫菴本ふ勝入齋の旗本りとく成ていゝ危ふ

りゝりハ秋田嘉兵衛尉梶浦兵七郎片桐與三郎片竹村小平太ふと少ゝゝつて戦ひ居たりけるゝ此由と見るゝも手前の敵とハ追ちらし手勢引つゝ助來て竪横十文字ふ切てまはり防き戦ふありさまたとへていとんりゝともふゝ志りりとハゝとも敵ハ多勢ふり味方ハ小勢ふゝとハ相叶ゝゝて討死をとあり

別本家忠日記ふ天正十二年四月九日井伊直政先鋒とゝて堀秀政と戦ふ堀ふ手ゆふゝて樂田ふ引退く池田ふゝと止むゝとも秀政止ると能ゝゝ井伊ふ兵池田と伐と急ふり池田ふ勢進ま

び森武藏守進んで戰ひ火炮ゟ中て死と三州方平松金次郎一番鎗と合ひ鳥居金次郎も同〳〵く進む二番鎗あり今村桁之助鎧と着さび三番鎗と合と小野淺之助組打の功あり池田ゝ臣秋田加兵衛梶浦兵七郎片桐與三郎竹村小平太戰死そとゝ〳〵

重修眞書太閤記九編卷之廿五終

重修眞書太閤記九編卷之廿六

片桐河合両臣勝入齋と諫むる事

并井伊万千代の事

去程ゟ上方勢總敗軍となり〳〵ハたゞ〳〵勇氣たゆ〳〵び武邊功者のゝこいへとも多勢ゟ引立られ迯ゝる堀久太郎うつハ思ひの外ゟ身と脫ゝて一時の物笑とあり田中久兵衛尉ゟとの如き强ゟ日頃の器量ゟ預ゝる非とゝ其時の機發と取失ひ〳〵るもわ〳〵びをこゝてハ天時運行の然ら〳〵むる処ゝ〳〵ハ更ゟ人力のゝとを制〳〵ゝとを止むゝさ

とかくべく池田勝入齋は大膽不敵の良將なれは敗軍と集め死骨を肉をけ此一戰を三州勢と切破う從來の武勇と顯ち〳〵自他の眼をおどろかさんと蹈こたへ諸卒をとけ〳〵一足も引〳〵と床机をうめり居たりける処を最愛の壻森武藏守は目の前ふうと多年付まとひつる相傳の郎等ともを半過戰死〳〵今は漸母衣うけ〳〵近習の武者三四十騎ふう外をたのの〳〵きのもなう〳〵ては三州勢を切ふひけ岡崎の城を襲ひとらんと抑盲亀の浮木を逢ひうとんけの花さく春をまつを似たりとおのひ〳〵は勝入齋も我運命をそを終をくを時

いをうぬと心たけ〳〵もおのひ極め勿々を〳〵いをまを〳〵見えをけり爰を池田う家の老臣を片桐半左衛門尉河合又左衛門尉とてありけるを勝入齋身近く呼をを付をひ居たるも其方共の心中をもを嬉〳〵おもふをう入道本意の如く三州を切取たらんをは両人を城のをを共を天壽を盡ををて富貴榮花を同〳〵ををやとおのひ〳〵を我運命今日只今をせををたりいをもしを両人此場を切ぬけ先手をを合戰をる嫡子紀伊守之助ををひ丹後守を入道討死のを〳〵を告池田の家の後榮ををを〳〵あく

と後陣より打て三好殿今そこ〻長ひあひく武邊切
いさうあるく田中久兵衛ふともあるとわと肝とよ
も潰さて三好殿の陣すて如法よわ〻らひあひふ
ハ堀遠藤長谷川も云甲斐ふ〻いふるまはしその
内まハ森武藏守も馳付へて入道もその跡と黒む
へて然るとも三好といふ若のの軍そる様ともし
らぬのと同〻打出しこそこの敗軍の兆ふと
おのへ〻口惜けと又くり返し是と按それハ是
天運いまと特いさうさるるさなく〻ハ入道廿二歳
の時武藏守信行とて故殿の御弟末森よあくしけ
るる故殿と御中たうひて弓矢よ及ひし時偽て御

和睦のく清洲よまのふさ表しう奥へ通ふふ処よ
待ふ〻ひて組しさ討奉りしとわう今となうてた
のへハ共よ主君の御子なう兄弟の中わ〻さハ終
よ和融の時もあうぬ〻さと心わさく討奉りしと
るよ苦々敷おのふなうう故殿御事あうとも末森殿
今よまのしまさハ柴田も亡ひそ柴田亡ひそハ加様
ふ出陣そるともあるまよ〻さなうとおのふよをけ
て武藏守殿と討奉りしと我等り短慮の誤と返を
返とも口おし〻然とハ此身と無のの〻て武藏
守殿の尊靈となさめ申ふハ當家繁榮も疑ひある
まと此頃おのひうし〻なう其方とも此事とお

ちもなく紀伊守よりさるべくとや敵も近付ぬいそけやいそけと下知しさいへ入道う最期の用意せんと十文字の手鎗を取て立上る

織田系圖ゑ武藏守信行くゝめハ勘十郎信勝といふ信長の弟なり尾張國愛智郡末森ゑ居ゐゑ

柴田勝家佐久間大學助長谷川宗兵衛山田孫右衛門なとゝゐゑ臣たり弘治三年正月清洲ゑ招てゐゑとゝ殺を車ハ前ゑ見も末森村桃岩寺ゑ墓あり前武州大寺松岳道悦大禪定門といふ

片桐半左衛門尉河合又左衛門尉入道の口狀と聞とゝう御諚の趣道理を盡されハ上ハ我々如き愚

蒙短才とゝ以てとゝう〳〵申へきゑ非ゝいへとも軍のあるゝハ勝負ハ武邊ゑるのゑあゝゝ傳ゑ承る鎮守府將軍陸奥守頼義朝臣ハ只七騎ゑ打ゐさゝとゝ〳〵も終ゑ切勝九年の軍功と立ゐゑ右大將頼朝卿ハ石橋の軍敗とふゝ木の天河ゑうゝゝとゐゐひゝともありつるゝ日本武將の世と聞きゐゑ非とゝ只今御討死とい殿の御短慮と憚ゐゝゝ存ハ御勢落うをていハへとも猶いまゑ二三百いハへゝ面々必死ゑなりて働きハゝゝ三州勢と切崩ハゝとんゑ何の難きとうハへさ一旦の御怒ゑゑうて百年の御身と誤らをゐゑと返ゝゝも勿体ゐ

くひ敵のあまりよ近つきゆくぬうちよ早御弓取ひへ〳〵とそゝめしうへ入道打笑ひ両人の意見もさるとあゝ〳〵武将の身よ取て死をへき時と生へき時とのさうひと知と大事あり越後守仲時の番場よ死をし時従軍かと四百三十余人あり相模入道の東勝寺よ自害そるや一族門葉八百余人と聞ふと等ゝる白刃の下よ身と亡ゝて日頃の恩と報をとゝへい一方打破るへ〳〵必死の力とそゝをとゝへゝ誰うへ否といふべきされとも末代の名とゝ〳〵子孫の面をけゞさしとゝのゝふう故よ自滅をしにあゝぞや楠多門兵備正成い古今よそく

と〳〵良将なく赤坂よも千早よも京の軍ふも死をると見をそ死ゝさうしゝ湊川すとへ一族即従六十六人と共よ死をし非をゝ是ゝふその死をへき時と死をすゝき時と能知つる故ゝうとゝふ〳〵入道おのひ切し上いゝうよ詞と盡とともひるうへをゝさ心へゝゝさゝ詞とふゝよ無益の舌と動〳〵徒よ時とうつとゝふうとゝゝ行〳〵と追ゝうそひ手鎗と取てゝう〳〵と打ふう八方よ眼とゝゝぐうて待うひくゝう三州勢へ池田う備と目ようひ濱松の御旗本衆面もふゝび切うゝる中ふも井伊万千代眞先よとゝむと見て万千代う鉄炮の

のの白さしゐへのさしのさし万千代か前より
けふさかおわめき叫んで寄来れは勝入斎の左右
に扣えし母衣組の侍心得たりとつゝまにとの
との得ものをおつとりて驀直に突てかゝる万千
代の手のものゝ潮のこく如く皆面にそゝそうしう
は池田か侍多と先途と切むすふ片桐半左衛門尉
河合又左衛門血刀を打ふりて前後左右にのてう
くふは十文字に切まくれとも井伊か手の者勝軍
へしたりとに大将の御馬の前ふりあまをましと
入替く攻立る中にも井伊家の侍に村越三十郎は
池田か家の渡邉靫負とさしり合火花をちらして

切合を甲州侍の河合四郎右衛門甲州流の殺弓引
しほり切てはなてれはあやまたす渡邉靫負か腰の
つかひをまてかゝて射たり射されて渡邉大にいかり
て当の敵の村越をすてゝ河合に向ひけるか村越
をうさんと駈よりて鎗取直し胸板より押付の板ま
て穂先白く突出せは渡邉靫負心はたけくあれと
とも痛手なれは倒れしを片桐半左衛門尉と河合
又左衛門尉傍輩の討死を余所に見てあのまゝ引
退くこと何程か口惜しく又かなしけれとも紀伊守
への遺言とうけつれは心ならすも一方を打やふり
先鋒としして落行ける井伊万千代はあまりに深

入し是非に大将と討取るゆとおのひしうへ本陣の床机そのへに目とうけ鉄炮と打を進こける処に黒糸おどしの鎧に頭あうの甲と着し指のいさ〳〵ぬ侍三人十文字の手鎗と取て突うる直政そこしもさこうび突うう終に一人と突伏二人に向て突合たう安藤彦四郎直次は先刻より味方の陣々とうけ廻り壮士とうけよしこし御旗本に参上しあうけるう万千代のそこむと見て又御旗本とうう出池田う備に駈向ふるいまと然るへこと敵にあこびそうよ〳〵と突廻りけう処にうたなく勝入齋に出合いこと参らふと聲とう

け一往一来虚々實々をさまる〳〵戰にむうふに井伊万千代たこうへ知び二人と敵に鎗とあこと彦四郎見るうう南無三寶万千代うこと給ふなよといふ〳〵に蒼て突ひむ鎗のこけ〳〵けとい勝入齋もあ〳〵らひ兼ちと請鎗となる処と踏込て突伏処へ永井傳八郎こうう来う〳〵いそれ首打とひそそ〳〵万千代と援く

池田勝入齋戰死の事

并片桐河合両人の事

永井傳八郎直勝といふ三州大濱の長田平右衛門尉直吉の子と云う今年廿二歳より勝とし美男

子なり抑平右衛門直吉の父と喜八郎廣正とつゝ
大濱上宮社田と領そと云り廣正の父ハ郎平大夫
政廣なり政廣ら〳〵めハ吉八郎とゝ長田庄司忠
致の後とゝや忠致ハ柏原山陵天皇第六の皇子葛
原親王の曾孫上總介良兼の長子武藏守公雅の子
平大夫致頼の嫡子大矢左衛門致經の後なれとハ
河内守頼信朝臣ゝのゝ〳〵相傳の家人なり忠
致の義朝と弑をゝこと忌こゝとて政廣の妻の父
那波刑部少輔大江宗秀ゝ養子とゝ〳〵大江朝臣ゝ
改めゝ〳〵といへゝり或ハ政廣ハ那波四郎入道宗教の
末子りて長田ゝ家と繼ゝ〳〵も云りゝや宗教ハ那波

彌次郎宗元の子なれハ鎌倉幕府政所の草創大膳
大夫廣元朝臣の後なり傳八郎安藤とハ斷金の交
深ゝりけるゝより我突ふをゝ勝入齋ゝ首と討を
ゝとゝやそのゝち彦四郎傳八郎相共ゝ御本陣へ
參上ゝ勝入齋の首と實檢ゝ入けるゝ御感あさゝ
らぶ御弓と賜ゝりて其勲功と賞をゝと御弓
と賜ゝり次ゝ内藤四郎左衛門尉丹羽六大夫と御
使とゝ〳〵て勝入齋ゝ首并ゝ分捕をゝ采配太刀と添
て永井傳八郎と信雄公の陣へ遣ゝ〳〵る信雄大ゝ
悦ひゝ〳〵傳八郎ゝ池田ゝ帶をゝ篠雪とつゝ太刀
と賜ゝると云ゝ

或云永井弁捕池田勝入齋の太刀差表ゑ兼定條の
雪とあり差裏ゑ片桐與三郎とあり長二尺三寸
三分亂焼柄長六寸七分薫革巻頭角巻うゝ目貫
金の獅子縁赤銅二筋切羽金む〳〵小刻鵶目金む
く二重坐鍔鉄立二寸六分横二寸四分八角両ひ
つ笄のうゝ鉋ゑすてうめ角筋とハ銅ゑすてうめさ
ゑ是と以て考ゑ之い永禄天正の頃軍陣ゑ太刀
と用ひと打刀とむひとせーと明らかなり
又兵家茶話ゑ遠州荒井驛笹瀬六右衛門祖父彌
三郎方ゑ傳八郎止宿ー彌三郎勝入の首と濱松
へ脊負參り實撿濟いて彌三郎屋敷の内葬て一

社の神と崇むと云軍ハ四月八日首と納めいハ
四月廿八日ゑうと云う但濱松へ首と脊負ゆさ
ゝへ何の故ゑや大将のまさ小牧山ゑまをを
ゑ
安藤直次物語覺書ゑ久太郎ハ二の手故手ゑ不合ー
て居けるゑ跡ゑすて秀次敗軍をゝゑ敵追來るゑ
ゝと聞則備と立て相待さう味方の人数ハ逃散
敵と長追ーゑなうて追うゝる処と敵ハ
あゝてゑすて待受戰ふゑう味方崩と立方々へ
敗北と敵此いさゑいゑ乘長久手さゝて追來る
処ゑ濱松の御旗本の勢いつまゝ山陰ゑう敵

の向へ押出し御旗本の馬印と押立ひけとへ敵へおしとゝとゝ進み得ず敵間地くゝよりて水たまりなと有所あり敵味方暫くゝ合てつゝき懸らべ味方の鉄炮御旗本ゝ間と

つゝて山の尾つゝきゝ打をけると安藤彦四郎直次（後号帯刀御側）よりありけるゝ申様あとなる鉄炮此方へ引ゝけ敵よさし向打ひて可然哉と言上しけるに左ゝ思召早々此方へ呼ゝとの仰みゝ使を遣ゝけとも面々手前とさし置是輕と遣くさんと云ものなし重ねて呼ゝ遣くさとけとへ漸鉄炮の者少々ゝ来る扨彦四

郎ゝ申つる処ゝうゝとをけとへ案の如く敵是ゝ難義ゝて軍中動揺を森武蔵守も鉄炮手と頁ひ其内敵味方の勢互ゝ〳〵ゝをのゝけ引あとゝいへとも戦ひくゝまゝ〳〵両陣蹈ひたゝく居ると御覧をゝとゝとの御下知あるとも猶容易ゝらさゝ〳〵處ゝ御先ゝて平松金次郎も鎗と合を是ゝうゝとも思ひくの働ゝ此節御馬の先ゝて進んてゝをけるは僅ゝ十四人なり其内彦四郎いくゝゝ敵地と見るゝ手頁たる武者あり首と取んと進みける処ゝ本多八蔵傍ゝうけ出彼手頁ゝ乗

かりにれば彦四郎は先へ進む人藏う討たる敵森武藏なり
扨小高き処より黒母衣の武者三十人ばかりうめき
まうみる処へ彦四郎鎗を以てつきうる續く
味方の輩少々うるると見て畏まりける黒母衣
の武者ともは開き退く然る処より沐儿より腰掛さ
る武者彦四郎と見てきうとめと云て立上る所
と彦四郎走りうる突倒し首と取んと思ふ
長田傳八郎（後号永井大夫）来て其武者よのうめくる
其外りも二三人進みけれは彦四郎鎗を抜て傳
八りの首をとりをける此武者池田勝入なり夫よ
り彦四郎は先へ進む處より井伊万千代黒母衣の

武者と組てみると見て詞をうけ見合をる内よ
万千代事なく組ふをけれは助るよ及ばず彦四
郎申けるは人数を預りたるのの自身の働は無
用ふり跡の人数を集らをとて猶先へ進む池
田勝九郎は勝入う戰死を聞て取て返し馬上よ
て馳來ると彦四郎突おとし首を取それう猶
先へうをさけるよ鎗を打折たをとは味方の者の
鎗を持けるよ向ひ其鎗を借はへと所望けを
ともあるこへ其あるうよ味方の衆歌を取巻討
ひをと見ゆる故彦四郎彼敵を討へき間此刀よ
取うへ鎗を我よ與えよとて刀と鎗と取替て進

む是へ〻らめ討さる敵の刀なるとゑ取〻つる
なり彦四郎ハ直ゑ其敵へめ〻う討取〻なりと
見ゆ今年直次廿八才と云まさハ三十才とも何
とゝ是ゑるとゝ〻び勝九郎と云ハ紀伊守之助
の事なり
流布本ゑ井伊万千代十九歳とあり誤なり万千
代九永禄四年辛酉の誕生二歳の時父直親朝比
奈備中守のためゑ戦死〻けるとハ新野左馬万千
代をう〻〻〻置天正三年二月十五日ら〻めて御
目見〻あるとゝう仕奉り同十年十一月廿二歳元
服〻て兵部と稱〻十二月甲斐の武田ゑ侍山縣

ゑ同心土屋ゑ寄騎等と預る小牧の時ハ行先手を承る
ゑ赤旗さ〻て赤漆具足なり〻ハ見る人赤鬼と稱〻
けるとなり然るとハ万千代といふ名ハ小牧の時稱とゝ
らゝび又安藤彦四郎直次井伊万千代衆道の事と記も
其事實信とへ〻〻び因てあれとゝ〻び又傳八郎と勝入
との組討全く虚妄ゑるとハ同〻〻くあるとゝ消る
紀伊守之助ハ父の戦死も知ゝ樂田とさ〻て進〻けるゑ跡
ゑう競ふ三州勢勝関と作り〻追来るゑ心なゝ〻ふゑう
みるとハ味方の敗軍ロ々ゑ勝入齋殿討とさをあひ〻と告け
るゑ紀伊守大ゑ驚き父の討と〻由と聞あゑう何とそ獨
のゑるとへさゑと甲の緒とゝめ馬の頭と立直をハ片桐半

左衛門ちう來るそのいとたち身に立矢ハ蓑げの如く折うけ大童の姿にて溜息繼つゝ入道殿のうゝ仰らるゝ事ゝとゝ御忘ゝとゝや平に落さとゝくゝ轡にとう付いさむゝとも更に聞入ず家督のゝとハ古新にたのむなう我ハ入道殿の御供ゝて死手三途の先うけきんと一鞭あつるゝハ馬をきさうにとをゝさゝ半左衛門も手ハ負さうあるゝと止るカふくのゝ上うて見送るうちに紀伊守と見矢ひ止とゝ得とあゝく落て行方ゝらゞ河合又左衛門も勝入齋に引ゝうるゝと龍泉寺山の方へ落來りゝふ渡邊勘負う戰死をゝ骸をうくゝ帶居たゝーカハ正宗二尺八寸妻子へうくゝをゝとゝ涙とゝゆゝ取上てあれも樂田へ落ゝう

重修眞書太閤記九編卷之廿六 終

重修眞書太閤記九編卷廿七

池田紀伊守之助戰死の事 并濱松御軍慮即智の事

池田勝九郎之助今ハ紀伊守といふ勝入齋の長男今年ハ廿六歳なう長久手の軍敗ゝてうハ樂田さゝゝと落行けるゝ敵の中に聲高く池田勝入齋と討たうと呼ちうけるゝと聞て胸とゝろき實に然るゝと聞耳たつる処へ敗軍の士卒ちうゝと來う入道殿をゝや討ゝ給ひぬと告けゝとハ紀伊守落る涙と押え父討死ゝゝひてのち落のゝ家名と繼ゝとの仰を

へ片桐河合ようたゝうる承るさうなゝうゝ三途の川死出の山獨越行あゝらんとおのへハるゝも哀しきさそ弓矢取身ハ名あそおゝけゝ父とそゝ戰場と迯たゝんのと誰うハ人といふへきぞ待をゝへや今追付可申そといひつゝ馬の頭と引返し鎧の上帶つゝくメ勝わこつたる三州勢の中へ面もふゝぞ切て入雜立雜ふせ前後左右ゝ目と配り馬と駈けゝハ參州勢ふゝろハたけゝと云ふゝら紀伊守一人ゝ揉立らゝと四度路ゝのうて見えけるゝと安藤彦兵衛直次きつとみて天晴大將や鎧の紋とたゝうゝ見ゝハ池田ゝ一族とおかえゝろ勝

入齋とハ突止たゝとゝる永井傳八郎ゝゆつりたゝうこれ是も劣ゝまゝきぞいそ打捕んと鎗引そゝあ小踊ゝて馳むうふ紀伊守も安藤彦四郎とハ見知たり父ゝ鎗付ゝと聞ハまゝとう突ふをて當座の仇と打へゝと三尺余の大太刀と眞向ゝさゝうさゝ馬と駈寄一討と切付る彦四郎も近付ゝるゝゝみとハむうゝハ池田勝九郎今ハ紀伊守得たりやと聲うけ双方一度ゝ打合を互ゝ名譽の剛の者請つなうゝつ一交もをゝあゝらふゝろう紀伊守ハ今日討死と思ひ定めゝ軍ゝう三州ゝそハ安藤彦四郎ゝる武士なうゝうハ父のゝうゝ死出の山越さひ

〻きよ幸の道連ぞとふる退とと呼ちらつ〻打わふ太刀の鋒よう散と火花のちけ〻〻て彦四郎も汗水よなりおれい大事の敵ぞう手間取うちふまたのや人の助来ん早く打取勲功の賞よあつ〻んとつ〻〻秘術ハ東海道よ並ひなき濱松ふうの穂長の鎗透間ぞけとハ紀伊守も心とくさき手とつ〻〻ともとれハ彦四郎請鎗よの〻成ゆけハ紀伊守増々氣とをけまゝ是非よ打取冥途の旅よ同道ゝ先立ゝ父の勝入齋よ土産とせんと心とつ〻ゝ手とらさぐ彦四郎ハ今朝ふうふさ敵おわ〻打たとと中ふも勝入齋父子共よ討取ハ名譽ふうん

と思ふよう南無や八幡大菩薩力と合をめへよこ心よ祈念ゝ聲とくう上うつさと突ハ紀伊守ゝ射向の板と突砕さわまる穂先よ脇腹とくさとつく急処の痛手よとゝもたまゝび馬ふう下へ眞逆よこうと落彦四郎ゝけふ押えて首とうき落を是と見て三州勢一同よ聲をうけわ〻安藤彦四郎ゝ仕さり御手柄いと式代ゝひとゝ万歳と祝ゝて関と作る勝軍ひそいさまゝひよ此勢と脱さび樂田なる羽柴秀吉の陣處よ押拭たゝハ只一のこよ採おとゝ秀吉と打とるゝさもなゝハ上方へ追うへとゝ二川よ一ついふもとつよゝと總軍

ちさうふ勇ミたつと物頭衆もこゝめうさうへ
御本陣へ伺ひ御さゝ圖ゑ信をてんといへいつ
しゝも然るへゝ御本陣すてゝも異儀あるへゝゝびて
や申ゑへとをう立らゑ諸物頭衆うちそろひ御本
陣へ参らるれい猪の腰原の林のちゆうゑ御陣と
設げゝゝと外幕内幕嚴重ゑ引ゝてゝ中ゑ敷皮敷帖
その上ゑ御床机と立御弓御矢の飾首帳の式とと
このへ南天の手のこひ手水鉢種々の故實と正し
首とも實檢ありける中ゑも勝入齋の首級ゑ於て
ハ一城の主とゝひ織田家の縁者ゝゝて一方の大
將なり自餘のものゑ混とへゝゝびとあゝて甲斐

源氏ゑ傳ふる式とも尋ぬるあひけるゑ後三年の軍
ゝてゝ武衡ゑ首と八幡殿の實檢あゝゝ時の様と
ふゝひ覺えしのあると委細ゑ申上ゝゝいそれ
ハ秘藏の事ふゝう然るへゝゝとてまつ御座と東ゑ
おゝむけて御床几ゑ敷皮をうけ南こう北ゑ向ふ
て井伊の兵部敷皮ゝゝゝ首帳を前ゑ置てゝこま
ゑ一ハ近習衆三人北ゑゝ巽ゑ向ひて敷皮の上ゑ蹲
踞し御弓御矢と持御床几の後ゑ御馬廻ゝ衆五人
おなゝゝ敷皮ゑ著御手拭御巴とる井伊兵部首
帳と取て天正十二年四月九日於尾州長久手合戰
池田勝入齋首安藤彦四郎直次鎗と付永井傳八郎

直勝首と打捕之とよこと上る時安藤彦四郎へ御前
へ向て畏り両手と地へ着て平伏をゝ永井傳八郎
足打と持首の右頬と御覧へ入うい〳〵さい朴の木
の葉なりその時御馬廻り衆ゑい〳〵と唱へ
終るおろ御匹の役者伺候して御手と清さる御手
水とゝれい御手拭の役者御手拭と進る時總軍一
同へうちとり〳〵と十聲わと唱ふるなりその次へ
首帳の役人池田紀伊守首安藤彦四郎直次鎗と付
打捕なりと讀上る後の式前と同一首一つ御覧わ
るとへ清水とめゝい事我邦上代の風俗すて死穢
へあゝい解除をゝとの残とるなり加様の御式と

もとゝゝ頃諸物頭衆追打の事と申上〳〵へ上
へ聞食と御氣色わ〳〵何と申と上方勢と追打を
んと若さ侍ともゝゝゆるとゝ鳴呼味方へ養ふの
の〳〵左わとへ武〳〵勇めるい必定天下と切鎮むへ
兆と知とゝ能々寝美〳〵とゝをゝた〳〵物頭
ともいゝゝゆる計と能と知と以て
その能とゝるゝ〳〵敵も敵へゝるゝのなり羽柴
秀吉いそのうゝ木下藤吉郎とて右大臣信長公の
御草履取しのなるゝ意あゝて侍の負へ入物頭
となり墨股の城主となり近江の淺井と亡わ〳〵て
小谷の城へ廿万石そへて賜ゝゝそれゝゝ西國の

討手として播磨より下向し別所と立わ浮田と降し毛利と軍して数城とうちとう右大臣殿の伐と報し葬儀を取行ひ柴田と滅したるまて一車とて誤ることなく今すて上座ふつゝ大名と我家人と同し様に召仕ひ其計うゝ〳〵其策世に勝とて凡人とおもとてとび池田勝入齋う中入して急に引上び終に討死しつるとい全く秀吉の意とおもれど實に勝入齋の心うをとることなるへしされい父子共に戰死して中入の恥と歟ふ処と知るとも秀吉〳〵ぬとつゝの白わ〳〵知たゝんまい秀吉それ〳〵に備を設けて待あるへし敵の備の定ま

ア〳〵処へ打寄て何の手柄のなるべきと昔楠正成の天王寺へ出張をし時初い六波羅の討手立わ〳〵もなく負て引返しけるとい重ねて六波羅〳〵う宇都宮彌三郎公綱をさし下さるたり楠う手の者宇都宮と戰ゝんといひ〳〵に正成陣を引て戰ゝび公綱たけくしと正成弱さにあ〳〵ふとも公綱う手の者いれのひ切死とゆて軍とのてう正成う勢い勝て心に敵とあふとる侮る心を以てたのひ切し敵にあと池田と森とを打て心あ〳〵三州勢何とて秀吉う勢に對揚をへさ勝て兜の緒とゝむるとい今の

時と云あり急き味方の諸将を引上へ〻使番のの
共其意を得よ早々と仰らるゝうへ何とも畏ひと
御請〻て乗出し龍泉寺山の麓まて馳出しのを
申の刻の終りまてそうは皆呼上げるよ何とも聞ぬふ
りして打けるよりて使番衆大音よ上意あり御
諚ひと聲々よはれい是わと勝たる軍と何と
て此まゝ引取へき秀吉の新手出張あらへ願ふ処
の幸なり上方勢の軍ふり恐ろしゝ樂田の陣
と追拂ふへしといさましけるとて大須賀五郎左
衛門尉水野總兵衛榊原小平太次弟〻よ馳來り引
取ひへしと下知し鐘と鳴して呼集めしうへ何も

一人よ打寄て此競よ樂田よりう夜討をへ必定
勝軍となるへきと各まて我々よ引上ふとへ心得
そと不審たつもへ三人衆大将の御諚ひ森池田の
討死よ敵いゝ用意して備嚴重ふるへけもへ面
面寄ものふとも十分の利あるまてきなり其上よ軍
の本主へ北畠殿あり當方へ援兵なり秀吉ようの
うらへ當方ふ二つ應をへ當方よううるうよ及
ふへしとの仰なりと下知しひもへ何も申へ
き理なり引返しけるとて以て上よへその夜小幡よ
入御ありて用心をひ〻備と分たれうつ本多豊
後守廣孝の勢と龍泉寺山の山間よくゝ置と秀

吉之介援兵の來るを防げとて策を細々と仰含め
らるゝ然るに夜も初夜と過ぎても更に援の
來るべき音もなく豊前守恐の者とゝ〳〵ゝ
殘り置小幡の御陣へ參上して仕まつる小幡の御陣中
へ本多八藏とゆ〳〵出されて其方森武藏う死骸と見
付なゝ〳〵太刀鎧とうと分捕をゝ如何ある心
るとをゝやと御詰あるゝ八藏〳〵とまう御
勢の進むまゝ跡に付て走るゝ〳〵手負たるのゝ
安藤彦四郎鎗と付いと同時に組付いて処彦四郎い
八藏に任せて猶先へ進こゝに依て手負と能見いへ
ハてゝや死果てい其上に冑間と鉄炮に打ち首も

見苦敷いゆゑ打取不申但太刀へ切のゝと見い間
あるに有之い死骸とたゝ見いに金胴と着た
るまゝ二ツに切てあゝいまゝあるまゝ〳〵い
間分捕仕い鎧い毛引小札に勝れたる製作とに
金物に鶴の丸と打ているうの〳〵や森武藏にハあ
らざるゝと存いてゝ取いへとも死たる者の具
足ゆゑ打とゝらいと言上に上まい唯打笑をゝ
ふのゝまゝと何とも御詰ふゝ鳥居金次郎おゝ〳〵
召出され其方へ日頃に似合ぬ臆病のゝといて
し平松に先と越されゝ殘念なうと御詰ありそた
しうなる御褒美ゝ〳〵ぞ二人う蟹江に戰死を

し張本ふうと後よハ思ひ知とさう
或云森武藏守所帶刀來國行長二尺五寸亂燒銘
二字と云又ハ兼元すて二尺八寸とも云

小牧山諸將評定の事

并本多平八郎忠勝出勢の事

羽柴宰相秀吉卿ハ樂田の陣よ在て中入の一左右
と待ひとけるよ岩崎と打落しろうとも長久手原
於て合戰最中の由注進ありけるとハ秀吉卿さても
さても濱松の軍立ちとよ透間ふし近頃の弓取う
ふと感歎いたされける処へまさのや早打來り三
州勢おのひ寄ぬ後陣へ切ううひよう三好殿

のろくも打負ゑひ長谷川遠藤堀久太郎すて戰ま
けて追々是へ引退さひしうと申けるとハ秀吉卿大
よ驚さゑひ殘念や勝入齋ハ打死をへしあうし
さうかおしさうか森武藏も脫るすしと大息繼て
宣ふ処へ長久手の軍敗ると森武藏守ハ鉄炮よ中う
死し勝入齋嫡子紀伊守之助戰死しつゝふう家
臣あすと討死し總敗軍となうし趣と言上しけと
ハ秀吉卿立上らをゑひ三州勢左樣よ勝軍さう
んうハ下々まて上方勢と心易くおのひて居ゑん
其處へおし寄只一戰よ打碎さ三州勢の鋒おうと
肝潰さとんと鎧と取て肩よ投うけ馬引やつと宣

へハ御別當の藤八郎承そうぬと申もあえず大鹿
毛ゑ梨子地の鞍紫手綱うちうけて引出さい秀吉
卿ゆらうと大輪ゑ乗ゑひ鞍の上ゑて高紐うけ續
け若者共と大音ゑ呼そうく乗出ゑつへ誰うい
一人も後ゑつへさ追々ゑ駈出ひ勢ハ三万餘されと
も名譽の大将なとい馬うけうう備と立隊伍と
定めゑつへと平場の指揮とそ〜もうそうひ先鋒
次鋒の配分ゑいるそうたうそぬ日頃の調練目
さまうりける次第ゑう爰ゑ三州遠州の御勢酒
井左衛門尉忠次松平主殿助家忠両人の郎從三千
餘石川伯耆守數正内藤彌次右衛門家長酒井與四

郎重忠三手の家の子凡千五百余本多平八郎忠勝
六百余合をて五千餘騎ゑて小牧山と御留主をし
処長久手ゑて御合戦御勝利のうしと傳聞うつ
さても會合評定しけるハ今ゑ始ぬとなのうう御軍法
の圖ゑ中うハ事感し奉るも憚あり但秀吉卿へ定
めて長久手へ馳向ひゑらん我々此御陣と守り
て徒ゑ日と送らんと然るへうひ秀吉卿の後陣
ゑ就て追掛へるそいうう面々計ひゑへとありし
時本多平八郎忠勝生年三十七歳膂力まさゑ壯ゑ
氣ハ一世と覆ひつへし進ゑ出て申けるハ風の前
ゑ火と放ちるる如く手くゆき秀吉なう長久手へ

馳向ひ味方勝軍して油断の処と急よ攻んと打立なるん然者樂田の本陣い却て空虚あるべいさや麦の御留主居と引分樂田よおゝしを火と掛て焼うさいあの畑よ秀吉驚て取とりべきなう其時此方より掛向ひ道筋の在家を焼立たらい秀吉の勢ともゝ狼狽困窮をゝ味方前後よう切うぐう突立たらんよ勝利と得んと疑ひけゝしと申ける酒井左衛門尉忠次松平主殿助家忠内藤彌次衛門家長何とも最と同心いさよ忠勝ゝつゝひ申さるゝ処至極の妙計あるべゝ然者我々加勢と引とけて押寄いへゝといさゝ立ける時石

川伯耆守数正ゝと申ける忠勝の計策と案ゝて申ける忠勝の計策なるい秀吉の兆なるべゝ存い其故い秀吉の勢十二万と聞う長久手へ向ふ処三万余人と云ハ樂田なるいよ八九万の勢い丈夫あるべゝその大勢の中へ味方二三千の小勢なるけ向ひたらんよい何とも勝利あるべきや御下知もあるさよ打出て味方と損あるつさへ小牧山の本陣すて打落さるあい何とも心さや伯耆守よ於てい同心仕うべゝと申ひ是ハ忠勝ら申処必勝の計策なう秀吉よとよ難義なるべゝと推量しつるよう是と支えゝとて伯耆

守り大坂より趣きしのちまをおのひらまをけり酒井左衛門尉松平主殿助〇〇石川と疑ふ故より たゝちに軍を發さひ何さま御下知あるさまに大切なる御陣を拔出んと後勘その恐れとふるさまに非をと云て人数を出さひ本多もまさ数正をふりかへりおのへいそのまへにて我持口へ引取梶金平を呼て兵候より出しひるゝ暫時ありて立ちかへり敵の容子いかゝ〳〵惣軍にしかうより三万餘り但秀吉より當方の兵候より出しひ山村十内と申のより行逢ひ間それ違ひ様より打果しをひと〇十内の首を出ひ忠勝大悦ひ物見うのめをと打たる条近頃以ての珍らしく

秀吉鞭の勢あ〳〵ひ我鞭となりうへ〳〵あれを破るへ〳〵とて六百余騎を二つにあ〳〵分梶金平三浦九兵衛牧惣次郎梶二郎兵衛以下三百余騎を引率し長久手さしを馳たりけるを石川伯耆守数正此を聞心中まひ平八郎定めて秀吉より喰付後陣を害るるからん秀吉まをとより難義なるへしとおのひおもをんうさあひけるひ平八郎我儘なる御許も無よみさうより御留主居をとをとをしと自由なる以の外とそしりあるとも酒井忠次松平家忠ハ結句平八郎ハ勇ありて時機を知り忠ありて變化を悟る万夫不當の侍やと舌を振ふて感しひうとなり

樂田より龍泉寺まで凡三里半より遠し龍泉寺より
猪腰原然して長久手なり

重修眞書太閤記九編卷之廿七終